

土佐清水市の民俗伝承(4) 「清水小唄」 市史編集委員 岩井 拓史

戦前の童謡・民謡作家、野口雨情（1882—1945）が、清水を訪れた際に書き残したもので、中山晋平が作曲した。雨情は北原白秋、西条八十と共に童謡の「三大詩人」と呼ばれ、同時代に活躍した晋平と共に「赤い靴」「しゃぼん玉」などの名作を生み出している。

あまり知られていないが、雨情は計4回来高している。3回目となった昭和11年(1936)、県西南地域の民謡作詞のために訪れた際、この「清水小唄」が生まれた。

1回目の来高中の大正13年(1924)に急死した四女・恒子(享年4歳)の13回忌法要を終えた雨情は、昭和11年11月、水戸から高知へ向かい、海路で清水に到着した。地元住民の案内で清水港や足摺岬、臼瀨を探訪し、この小唄を作詞した。歌詞には西日本有数の水揚げを誇った清水港の活気や各地の旅情などが盛り込まれている。

当時の清水劇場では発表会が催され、地元の人たちはよく口ずさんでいた。戦前までは町内で盛んに唄われたが、主に芸妓によって唄い継がれていたため、昭和30年代から唄い手が減少し、小唄の存在を知る者は少なくなっていった。

この小唄の掘り起こしに情熱を注いだのが、土佐清水市立市民文化会館の初代館長で、バラ抜き節の保存会結成に尽力した久松治幸(寿町・故人)である。中学校の音楽教員だった頃、地元住民が唄うのをテープに録音し、譜面にしていたが、時流と共に徐々に小唄は埋もれていく。世に知ってほしいとの思いから、平成22年(2020)、土佐清水市三崎出身で元参議院議員の平野貞夫に協力を仰ぎ、イタリアが生んだ世界的バイオリニスト・パガニーニの研究で名高い東京芸術大学名誉教授・山岡耕笹(宿毛市出身)に掛け合った。賛同した山岡教授率いるパガニーニ合奏団により、平成23年9月16日、市民文化会館で300人を超える地元住民を前に披露され、半世紀ぶりに復活を果たした。

清水の風土や豊かな自然を綴った雨情。叶崎灯台のふもとには詩碑が刻まれている。

清水小唄

土佐の清水は鯉の港よ

岸に千艘の船がつく

清水栄町や

気楽なところよ

三味や太鼓で

夜を明かす



写真4 叶崎の詩碑

「真念庵の物語(4)」 「高野大師行状図画」(市指定文化財) と「絵馬」



↑真念庵に伝わる「紙本著色高野大師行状図画」は、昭和47年(1972)、土佐清水市指定文化財(絵画・彫刻)に指定されており、狩野正末・長谷川輝敏・中村南征の3人によって描かれた。中でも長谷川輝敏は、長谷川等伯の門下の一人であり、丁寧な筆致で描かれていることが分かる。これらの図画は、現在、震災に伴う津波等による被害防止のため、中央公民館4階倉庫に厳重に保管されている。



←弘法大師蔵、僧形の並んだ三人の人物と合掌する一人の人物を描く(縦55cm×横70cm)。

この絵馬は、長崎県肥前西彼杵郡蚊焼村の小川茂平次一家により奉納されたと推測される。

17歳の子どもは足が不自由であり、恐らくは、足が良くなることを祈願して家族で24日間庵に参籠していた。絵馬裏面末尾に、「足立候こと」と筆書きされ、歩行が困難であった子どもが功德を受け、直立できたことへの感謝の気持ちがこの絵馬の奉納につながったのではないかとと思われる。